出羽清原氏

出羽清原氏は11世紀中頃の出羽北半で大規模な軍の動員を行うほどの勢力を持ち、前九年合戦では源頼義の懇願を受け軍勢を陸奥に派遣して安倍氏を滅亡に導いた一族である。合戦終了後は当主である光頼の弟武則が鎮守府将軍に任ぜられ、安倍氏の地盤であった奥六郡を支配下に収める。延久年間(1069～1073)にはさらに北方に勢力伸張を図った。後三年合戦では真衡・清衡・家衡の3兄弟による内訌に源義家・義光の介入を招くが、清衡が一人勝ち残り、奥州藤原氏の繁栄の礎を築いたことは周知の通りである。

その出自については、『陸奥話記』における「俘囚主」の記述通り俘囚出身であるとする説と、真人姓を持つことや鎮守府将軍への就任などを理由に中央貴族の清原氏の流れとする説が並立している。社会的立場についても、住民を直接束ねる在地豪族として位置付ける考え方と、秋田城の在庁筆頭として他の在庁官人や新興郡司層などを指揮していたと想定する意見の双方が存在する。

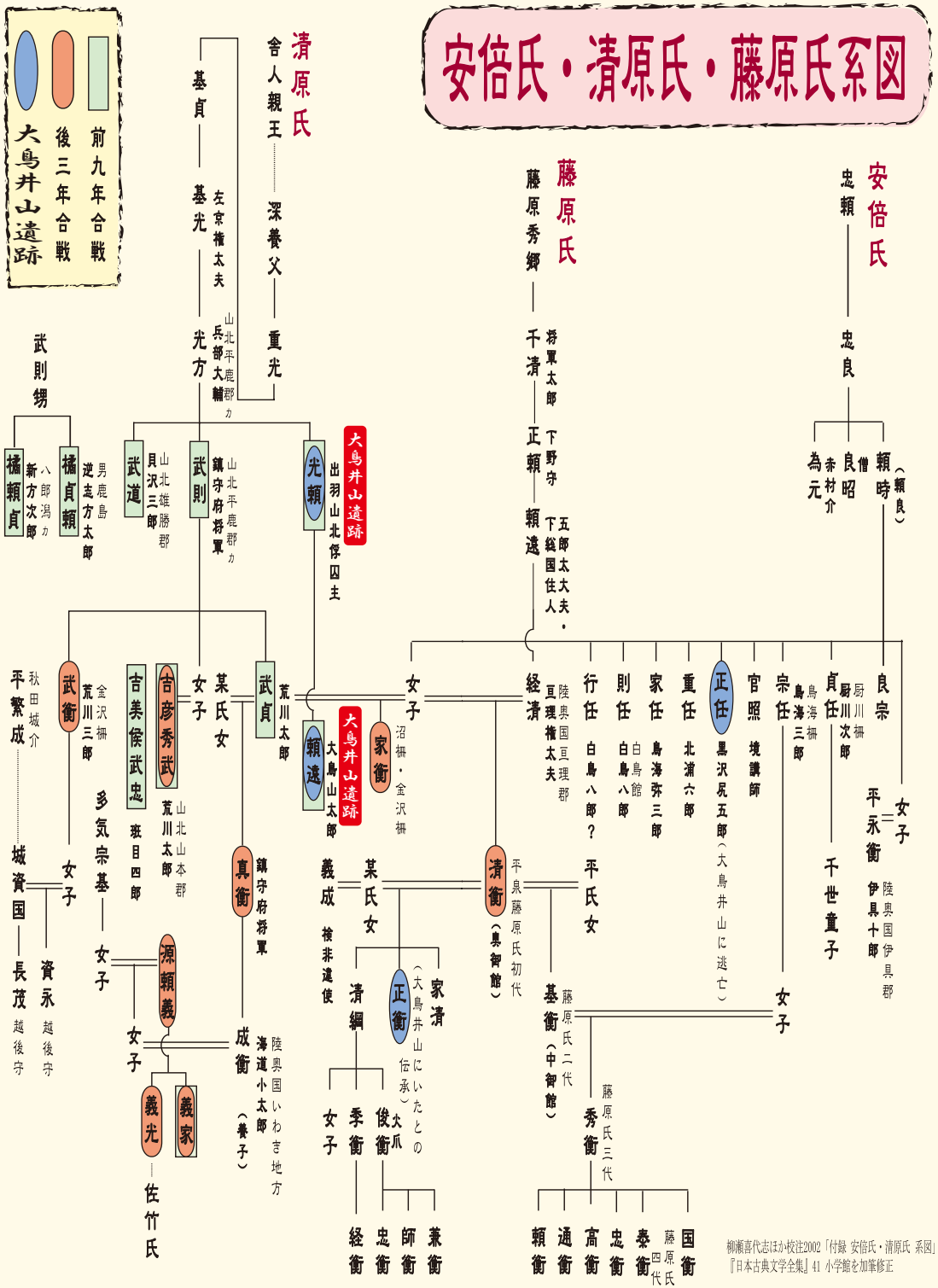
清原氏の勢力範囲は、前九年合戦の時点では横手盆地を中心に秋田平野及び男鹿半島に及んでいたと考えられている。『陸奥話記』には清原氏幕下の諸軍勢の押領使が定められているが、これらの人物の「字」に登場する志万・新方・斑目・荒川・貝沢等の地名が上述の範囲内に比定されていることがその理由である。なお、前九年合戦当時における清原氏の本拠地は横手盆地にあったとされているが、その根拠は『陸奥話記』において清原光頼を指した「出羽山北の俘囚主」という表記であり、また年表にて述べたとおり、前九年合戦段階での当主の子息が「大鳥山太郎」を名乗っているために大鳥井山遺跡と関連があるとされてきたことも間接的な理由とされている。

なお、前九年合戦当時の清原氏の当主であった光頼やその子頼遠のその後の消息は明らかでない。後三年合戦時の沼柵と金沢柵の中間に立地する大鳥井山に関する記述は『後三年合戦絵詞』には登場しない。ただし在地寺院の縁起に、金沢柵とともに滅んだとするものも存在する。

↑小吉山から出土した「かわらけ」

↓大鳥井山頂部で確認された掘立柱建物跡

安倍氏・清原氏・藤原氏系図



柳瀬喜代志ほか校注2002「付録 安倍氏・清原氏 系図」『日本古典文学全集』41 小学館を加筆修正